

■（１２７）爪痕を残すべきか、被災地で定年迎えた記者の懸念

津波で壊れた鉄筋の建物は取り壊され、地面に残る土台も重機で次々とはがされていく。平坦になった浸水地に緑の草が生えていた。約１年ぶりに訪ねた東日本大震災の被災地では、あちこちに小高い丘のように積み上げられていたがれきも片付けが進んでいた。

復興に向けた一歩だろう。ただ、発生時から取材を続けてきた先輩記者は逆に将来を気にしている。再び住宅を建てるのは危険なので、一帯は公園などとして整備する計画が進む。そして時が過ぎ、津波を知らない世代が中心になると、例え「碑」が残っていても、誰も「３．１１」を実感できなくなるのではないか。それが、この春の定年後も現地に残って取材を続ける先輩のきがかかりという。自宅の机には、広島原爆ドームの保存運動をまとめた文庫本。「奇跡の一本松」のように、後生に津波の恐ろしさを伝える遺構を各地に残すべきではないかと思い、震災と戦争を重ねながらページをめくっているらしい。

ドームも当初、つらい体験を思い出すとして解体を求める声があった。半世紀前の保存運動には全国の子も参加した。「爪痕」を残すべきか。今の子どもはどう考えているのか。（山）